フィールドの発見

―講義録「民俗学概説」第2講―

Discovery of the Field

Introduction to Japanese Folklore (2)

真　野　俊　和
SHINNO Toshikazu

At the University of Tsukuba, I give lectures on "Introduction to Japanese Folklore" to undergraduate students. This paper is a transcript based on my second lecture.

Fieldwork is a study in the real world; not in a laboratory or library. The history of fieldwork is traceable back to ancient Greece. But modern academic fieldwork began in the late eighteenth or early nineteenth century in Europe and America. A lot of geographers, anthropologists, natural historians and other scholars traveled all over the world as fieldworkers and did their field research. Fieldwork became a new method of academic studies through their trials.

Folklore study has two major methods for its fieldwork; participant observation and interview. Participant observation is joining and watching works, festivals or religious sessions of other people. But for some folklore researchers, their own jobs are the objects of their participant observation, not of other people, because they themselves are occasionally farmers, *Shinto* priests or Buddhists and so forth.

In interview method, the researchers have to ask a lot of questions to their interviewees and collect required information. One of the most important things is fundamentally 5W1H; when, who, where, what, why and how. Another is the ability to ask questions suited to the occasion, because many kinds of questions and replies are exchanged between two people at that time, and any interviewer cannot know the next answer for his or her question.

The field is an uncontrollable world for researchers, so fieldwork is a very delicate and time-consuming job. But to know the real lives of people, it is a productive and attractive method of studying humanities.

キーワード（Key Words）：フィールドワーク（fieldwork）参与観察（participant observation）インタビュー（interview）民俗学（folklore study）『山村生活の研究』

フィールドの発見—その光と影—

前講[1]でとりあげた二種類の学問類型に続き，もう一つ別の性格をもった第三の学問類型について考えてみようと思います。主として地理学，文化人類学，社会学，歴史学や言語学の一部，そしてこの講義で話をすすめていこうとする民俗学などがそれにあたりますが，ときには生物学，地学など一部の自然科学がここに含まれることもあります。これらの学問に共通するものは何かといえば，フィールドワークという研究手法を学問の中心においているということ，つまり研究の場をフィールドに求めるというところにあります。

フィールドワークfield workとは実験laboratory work，文庫作業library workと並び立つ研究法の一つで，野外——ここでいう「野外」とは文字通りの野外では必ずしもなくて，むしろ実験室や文庫(図書館)の外というほどの意味ですが——を舞台にする研究手法のことです。ですからふつう「野外調査」と呼ばれることが多く，それはそれでまちがいではありません。しかしフィールドということばの，もっと内容に即した日本語表現をさがすならば，私は「現場」ということばが最もふさわしいと考えています。実際にそのものが存在する場所，そのことが行われている場所に足を運ぶこと，そしてできるならばそのものが実際に使用されていたり，そのことが行われたりしているその時に，その現場，つまりフィールドにいあわせることを通して何かを知ろうとする，そういった方法を選び取った学問というものがたしかに存在するのです。

ではフィールドとはどんな場のことをいい，フィールドワークとはどんな行為をさすといったらよいのでしょうか。近年この言葉はきわめて広く使われるようになってきました。たとえば「神界のフィールドワーク」[2]とか「秋葉原フィールドワーク」[3]といったぐあいにです。こうした用例はその気になればいくらでも見つけることができるでしょう。それはそれで興味深いのですが，いまそうした方面での使用例には深入りしません。

フィールドワークという行為を最も広い意味で理解するならば，その歴史は古代ギリシアまでさかのぼることができます。古代ギリシアにはすでに地理学という学問分野があり，今日の系統地理学に相当するような研究さえも成立していました。地理に関心をもつということはフィールドを見るということにほかならない，ということはおそらく直感的にわかってもらえると思います。

反対にできるだけ狭く，近代の学問の方法としての厳密な意味に限定するならば，その出現はおおむね18世紀から19世紀にまたがる時代と考えられます。そしてこの時もフィールドワークのはじまりはやはり地理学でした。近代地理学の創始者の一人として常に名をあげられるフォン・フンボルト（1769-1859）は，1799～1804年という長期にわたって南アメリカ地方を旅しました。この間，彼は自然地理学および植物生態学に関する多くの知見を得ただけでなく，この二つの学問の基礎そのものを築きあげたと評価されています。フンボルトの南米旅行はまさしく今日でいうフィールドワークにあたるのですが，しばしば探検という名で呼ばれるのは興味深いところです。

また言語学においてもヨーロッパ諸言語とインドのサンスクリット語との対応関係が発見されます。そしてここから18世紀末には比較言語学という学問がおこってきました。ただ比較言語学がおこなった手法を，地理学における意味でのフィールドワーク，つまり現場に足を踏み入れることで

はじめて可能になるような研究方法に含めることができるかどうかについては，少々保留が必要かも知れません[4]。

日本の民俗学にとっての隣接学問である民族学（文化人類学とか社会人類学ということもあります）のおこりはもう少し遅く，18世紀の後半に入ってからでした。初期の民族学者で有名なのはヘンリー・モルガン（1818-1881）で，北アメリカ大陸におけるネイティブ・アメリカン（いわゆるインディアン）の社会・政治をフィールドワークの手法によって次々と明らかにしていきました。地理学や言語学と違って，モルガンが対象としたのは人間の生活そのものでしたから，その仕事は当時の欧米社会に大変大きな衝撃をもって迎えられました。みずからのフィールドワークデータに世界各地からのデータを加えて提唱した親族構造の発展段階説は，エンゲルスの『家族・国家・私有財産および国家の起源』に引用され，20世紀を風靡したマルクス・エンゲルス主義に大きな影響を与えたといわれます[5]。

ところでモルガンが世界各地からのデータを利用しえたということは，体系的とはいえないながらも，すでに世界各地でフィールドワークが行われていたということにほかなりません。つまり先の述べたような古代ギリシア以来の，近代科学とは直接につながらないフィールドワークと，18～19世紀に入ってからの，ある種の近代科学の基礎となるフィールドワークとのあいだに，すでにフィールドへの強い関心というものがヨーロッパ社会において培われていたということになります。古いところではたとえばマルコ・ポーロの『東方見聞録』などもそこに含まれるということになるかもしれませんが，そうした動向のきっかけはなんといってもいわゆる大航海時代に訪れました。1400年頃からはじまったとされるヨーロッパ人による海外進出の時代であり，地理上の発見の時代とも呼ばれているのはよく知られたとおりです。しかしこのときヨーロッパ人が発見したのは地理だけにとどまらず，実は人間と人間が作る文化そのものでもあったのです。

このことに立ち入るとなれば，じつのところ誇らしいとかすばらしいとはいいかねる歴史が現れてきてしまいます。それは純然たる知的刺激とか学問的関心という動機ではかならずしもなく，むしろどう効率的に植民地を支配していくかという，きわめて実際的な要請でした。つまり植民地の富を獲得するためには地理の知識が必要でしたし，言葉も使えるようにならなければならない，さらにはその背後にある現地住民の心理とか習慣とかといったものにも通暁することが不可欠だったからです。

つまりフィールドワークという手法は，それゆえにきわめて深刻な二つの相に引き裂かれることにならざるをえないのです。いうまでもなくその一つは，植民地主義の先兵という顔にほかなりません。しかもそれは歴史の彼方に消滅してしまった問題などではなく，今日も世界の各地で問われつづけている顔でさえあります。さらにより根源的な問題としては，フィールドワークという場面にあらわれる，調査するものとされるものという二者の関係の不均衡といった，いささか哲学的な問題にもつながっていきます。

それをネガティブな側面だとするならば，ポジティブな側面としてはなによりもまず「他者の発見」という事実をあげなければならないでしょう。かつてヨーロッパの人々にとって人間とは，世界とは，すなわちヨーロッパそのものでした。もちろんインドでも，さらには歴史上しばしば世界

にひろがる帝国を創りだした中国でも事情は同じでした。しかしヨーロッパの植民地主義的拡大こそが人間の認識のしかたを大きく変えたのです。世界をわがうちに取り込むのでなく，自らが世界に乗り出して行こうとするならば，他者の存在といやおうなしに向き合うことになります。彼らヨーロッパ人たちの目にはいかに奇妙に映ったとはいえ，そこにはまぎれもない人間が生き，文化を作りあげていました。古代ギリシア，古代ローマ以来の知性の伝統はほとんど何の役にもたたない世界であったにちがいありません。たとえそのあとに醜悪な植民地主義的収奪が待ちかまえていたにせよ，まずは他者の存在をみとめるところから彼らはことをはじめたのです。

フィールドには何があるのか？

歴史的な話はひとまず脇に置いておくことにして，まずはフィールドにでてみることにしましょう。まだこの講義で民俗学についての具体的な話はしていませんので，仮想的な民俗学のフィールドワークです。といっても皆さんはこれまでフィールドワークなる経験を全然したことがないということは，おそらくないはずです。小学校や中学校の授業のなかで，消防署や警察署，ときには商店街をおとずれて，説明をうけたり質問をしてみたりといった授業をうけたことが，一度や二度はあるにちがいありません。ただそうしたフィールドは受け身で設定された場所でしたが，これから想定するのは自分自身で行うフィールドワークである点が決定的にことなります。

まずあなたはどこへ行ったらよいのでしょう。その点から考えはじめると問題がいささか複雑になりすぎますので，どこかのある農村だと想定しましょう。農村といったのは，これまでの民俗学がもっとも得意にしていたフィールドが農村にあったからというだけの理由にすぎません。

さてフィールドと設定した土地にたどりついたあなたは，さっそく調査に入ります。調査・・・？

しかしいったいその村のどこで何を調査したらよいのでしょう。フィールドワークとは何かという問題は，はやくもここからはじまります。

たとえば歴史の調査にやってきたのだったら，これからやるべきことは決まっています。史料を探すことです。歴史資料（以後「史料」と書きます）があるところを探し当て，それを目にするのです。ともかく史料はその村のどこかに厳然として存在し，調査者はそこをおとずれて史料を読む。歴史の調査は，きわめて乱暴にいえば，そのようにしてはじめることができます。

しかし民俗とはいったい，その土地のどこにあるのでしょう。民俗とは何かという定義についてもまだ何も話をしていませんので，ここでは一般的な通念にしたがって，昔から伝えられてきた庶民の風俗・習慣とでも了解しておいてください。民俗はその土地のどこにでもあると言えるし，ないとも言えます。事情は，フィールドワークの調査対象が社会や言語，宗教などであったとしても同じことです。村のまんなかに立って四方を見まわしても，そんなものがあるようには思えない。しかしあなたはまさしくその目には映らない民俗なるものを求めてこのフィールドにやってきたはずです。

もうすこし別のことばでこの事態を表現してみましょう。フィールドワークとは，自分自身がこれから解くべき問題を定義する[6]ところからはじまるのです。問題をできるだけ明確に定義しない

かぎり，民俗はあなたの目には映ってきません。いずれ遠からず，民俗学という学問の主対象である「民俗」という概念についての議論をしなければなりませんが，どのようにそれを定義したとしても，「民俗」は，「史料」がそこに存在するようには決して存在しません。福田アジオ氏は「民俗調査とは・・・無限の現象の中から一定の価値判断をもって選択し，それを記述する—映画にしてもテープにしてもいいのですが—すなわち記録化することである」[7]と述べました。福田氏は「そこで問題意識とか価値判断とかいうものをもって調査をしなければいけない」というのですが，問題意識を持つこととは，さきの「問題を定義する」とおなじことを意味します。そして容易に想像がつくように，解くべき明確な問題をもたないかぎり，フィールドであなたはいかなる質問のことばも発しえないという事態におちいることになるのです。

では解くべき問題という，その問題自体はいったいどのようにしたら定義できるのでしょうか。このプロセスに関する限り，フィールドワークの学問がとりたてて独特だというわけではありません。先行する研究や書物から得られることもあるでしょうし，主として日常の生活を対象とする民俗学の場合は自分自身の生活のなかからうかびあがってくることもあるでしょう。問題を解くプロセスは何らかの形で客観化することは可能かもしれませんが，問題を生み出すプロセスはそう簡単ではありません。また問題に対する解答は，学問の世界においては決して終着点にたどりつくということもありません。一つの解答はあらたな問題への出発点でなければならないのです。むしろその解答があらたな問題を導き出すような解答こそがよい解答であり，さらにいえばそのような問題こそがよい問題であるのです。

フィールド・ワーカーたちにとってフィールドとのかかわりかたは，千差万別だということも覚えておいてよいことの一つでしょう。一つのフィールドに何年ものあいだ関わり続ける人もいれば，つぎつぎとフィールドをかえていくという人もいます。前者は必然的にその土地に暮らしている多くの人びととの間に，かなり深い個人的な交流がうまれてくることが想像されますし，後者のタイプにとってフィールドとはもっと機能的な場，つまり解くべき問題を解くのにもっとも適した土地であるべきなのかもしれません。もちろんそんなドライな感覚では決してなく，あまりに好奇心が強いため，少しでも多くの場所をおとずれすこしでもちがった対象に接してみたいという欲求がそうさせているのかもしれません。

そうしたいくつもの態度のうちのどれが最もよいのか，という問いはあまり意味がありません。すぐれたフィールド・ワーカーは，常に自分に適した方法でもってフィールドに入っていき，すぐれた業績をあげていくのです。そしていずれにしても多くのフィールド・ワーカーにとって，フィールドとはたんに問題の解答をえるだけの場ではありません。学問というものは一般に，仮説の設定，データの収集，分析と考察，仮説の検証というふうに進められるといわれます。問題意識をもって調査をしなければならないという先の指摘も，そうしたプロセスの一環だと考えることもできましょう。しかし一方で，フィールドとは問題の源でもあるのです。たとえば物理学や化学においては，仮説をたてたならば，その仮説の検証にもっとも適した実験の方法を考えます。どれほど合理的にかつ最短距離で結果に到達できるかが，実験方法の設計にとって最も重要でしょう。いっぽうフィールドは，自然科学の実験にみられるような合理的な場ではありません。ですからフィールド

で調査にたずさわっている研究者が，常に仮説やその検証のことを考えているわけではないのです。ありていにいえば，むしろ漫然とすごしているかのように見える時間のほうがはるかに多いはずです。そうした時間と経験の集積のなかから，一方では解答へのアイデアが生まれ，他方では新しい問題がうかびあがってくるのです。そのように考えるとき，フィールドはじつに不思議な場所です。

「見る」ということ　―フィールドワークの方法・その1―

では，実際に民俗学の研究者たちが現場で行なっている調査方法のいくつかについて考えていきましょう。

もっとも素朴な方法をあげるなら，それは「見る」ということです。祭や芸能を見る，農家の暮らしぶりを見る，漁師が魚をとっている現場を見る，といった具合にです。それだけでなく，調査のため私たちがどこかの土地におもむいたときにも，やはり「見る」というところから仕事を始めるのが普通です。いきなり後にのべるような調査にとりかかってしまうことはきわめて危険です。その土地の人びとはいったいどんなところで生活しているのか，家は，畑は，山は，海は，川はどんな風景をつくっているのか。家々の間を歩き回って，家並みのようす，宅地のなかの家の建て方やほかの建物，庭や木のようす，道はどこをどう通っているにか，神社やお寺，お墓はどこにあるのか，そして道ばたには昔の人が建てた石の仏様や神様，どこかの山に参詣にいった記念物であるらしい石塔などにも目をくばります。こういった全般的で基礎的な観察は巡見とよばれます。日本民俗学の創始者と言われる柳田国男が弟子と旅行するとき，車窓からみえる景色に逐一詳しい説明を加えていったという話はよく知られているところです。弟子にとってはこの上ないほど密度の高い巡見になったことでしょう。

ただし見るという行為はもっと深いところまで進んでいくことも少なくありません。その場合は「参与観察」というふうによばれます。参与観察といっても，観察に比重がおかれるものと参与のほうに重きがおかれるものとの両方の場面があります。

祭礼の調査の場合などですと，氏神様の祭りなどは一般に部外者の参加が許されませんので，ほとんど観察に終始するということになるでしょう。しかしもう少し開放性の高い町や都市の祭りの場合ですと，御輿をかついだり山車をひいたりと，一部分の参加が許されることはあります。また祭りの観察といっても，100パーセント見るだけということでは，目的は十分に達せられません。必要に応じて誰かをつかまえて説明を聞くというようなことが起るのはいうまでもないことです。

観察と同様に，参与の場面も非常に多岐にわたります。巡礼とか修験道のような比較的開放性の高い宗教については，実際にその行を実践してみることは，すでに一般的になっています。むしろ実践に参加してみないと，よりよい情報やデータがえられにくいからです。芸能についても同様ですが，特別なセンスや能力が必要になる分野ですから，参与という場面は比較的限られることになるでしょう。つまり参与法というのは，それを行なうことがデータ収集に有利になるとか，感覚的な部分が非常に大きいので，実際に研究者がみずから演じてみないと理解そのものが行き届かない，などといった場合に選択されるといってよい方法です。

参与観察法というのは，フィールドワークを方法とする社会科学において自覚的に選び取られた

手法ですが，こと民俗学にとってみれば，それとは少し異なった意義をもつことに注意しておかなければなりません。ある意味で参与観察法は，民俗学の本質とかかわる面をもっているからです。

さきの柳田国男は，日本の民俗学を確立していく過程で，ただちにアカデミズムのなかに足場を築くよりも，全国の在野の研究者をそだてることのほうに大きな力をそそぎました。そうした人びとの職業はさまざまで，おそらく最も多かったのは小学校や中学校の教師たちだったでしょう。僧侶や神主といった人びともおります。そのほか農業にたずさわる人びともいたことでしょう。地方で暮らしてくらしている野の研究者ですから，たとえば教師といっても純然たる教師ばかりでなく，農家に生まれそだったとか，仕事のかたわら農業もいとなんでいたという人も少なくなかったはずです。つまり農業という生業の研究についていうならば，その人たちにとっての研究は，たくまずして参与観察法にしたがっていただろうということになるのです。まして僧侶や神主が信仰儀礼を対象とするならば，それもおのずからに参与観察になったはずです。

柳田は，日本民俗学を「自己内省の学」だと言いました[8]。この言葉は多様な解釈が可能でしょうが，それぞれの場において生活している人びとが自分自身の生活についてみずから考えてみるのが民俗学というものであり，そこには自分自身の内部への非常に深い省察がなければならない，あるいはそこに導いてくれるに違いない，という意味合いとみることもできます。ある場所で生活する者がその人の生活それ自体について考えてみる，それはアカデミックな学問の言葉をかりていうならば，自分自身の生活に対する参与観察がそこで行なわれているということにほかならないのです。学問として民俗学を学んだ人が生活を論じようとするとき，ともすれば形式的な理屈の整合性だけに気をとられてしまいがちになります。そんなとき，生活者としての自分だったら，はたしてそのように考えるか，そのように行動するか，という観点からその理論の現実性をチェックしてみるのはたいへん重要なことだということを肝に銘じておいてもらいたいものです。

話を「聞く」ということ　―フィールドワークの方法・その２―

調査法のもう一つの柱は，インタビューです。民俗学においては従来これを聞き書きとか聞き取りと呼んできましたが，この講義ではできるだけインタビューでとおすことにします。インタビューとはつまるところ調査の対象者に質問を投げかけ，その答えによって何かを知ろうとする方法です。インタビューという行為は非常に多くの要素が複雑にからみあっていて，一概にその特徴を説明することはしにくいので，ひとまずはできるだけわかりやすいところから問題を解きほぐしていこうと思います。

あたりまえのことですが，まず認識しておかなければならないのは，インタビューとは第一義的には何らかの情報をえるためになされる応答であって，私たちの日常会話とは別のものだということです。たしかに日常会話もまた情報のやりとりには違いないのですが，インタビューによって何かを知るためには，はるかに注意深くそれがなされなければなりません。

さてこのインタビューが，なにかある事実についての取材であるならば，何よりも注意がはらわれなければならないのは，ジャーナリズムにおける取材などとおなじく，いわゆる5W1Hの基本原則，すなわち，いつ，誰が，どこで・・・というあの質問であるのはいうまでもありません。これ

らの質問をとおして得られた情報は，話の内容を整理し，多くの人びとへのインタビュー結果や，その他のルートからの情報とつきあわせ，いわば「裏をとる」という作業をへて，より確実なものとして資料化されます。そうした資料化のあと，どのような論理で学問的推論がなされるのかということは，また別のところで議論しなければなりません。

ところでインタビューという行為は，スポーツにたとえると，サッカーによく似ているように思います。前回の講義で比較した自然科学などの方法を同じようにたとえるならば，さしずめ陸上競技でしょうか。陸上競技においてその競技に成功するということは，理想とするパフォーマンスがそのとおりに再現されたときといってよいかもしれません。走るときの足の振りあげや歩幅，腕の振り，腰の落とし方，体の回転等々，長い時間をかけて繰り返し体にしみこませるだけでなく，その体の動きを肝心の競技の場において再現させようと努力します。いわば自分自身の体とどう折れ合うかというところに競技の眼目があるといえるのでしょう。それに対してサッカーは基本的に相手との交渉です。自分がこのようにしようと考えていても，相手が自分の期待したように反応してくれるはずはありません。なにしろ相手の期待をどうはずすかが，サッカーにおけるパフォーマンスの眼目なのですから。したがってここで要求されるのは，臨機応変な反応です。一対一の相手との状況も，ゲーム全体の状況も千変万化していく，その変化に即座に反応して最も適切な行動をとらなければならないというのが，サッカーというゲームの基本的な性格なのではないでしょうか。

インタビューにおいても，状況が千変万化するというのは同様です。むしろ想定通りに応答が進んでいくとしたら，質問する意味がほとんどないということになってしまいます。もちろん事前の調査によって想定すべきことはたくさんありますが，それに最後までこだわっていたら，そのインタビューは成功したとはいいかねる結果になるでしょう。実際，自分があらかじめ知っていることを確認するだけとしか思えないようなインタビューを見聞することさえ，まれにはあったりするのです。

たとえば，あることについてはこの人がよく知っているから，経験しているからという紹介があってたずねていった話者——ふつうインタビューによる被調査者のことをこう呼びます。ほかにインフォーマントとか，その訳語である情報提供者などということもあります。またインタビューの対象者という意味でなら，インタビューイというべきかも知れません——が案に相違してそのことについてはあまりよく知らない人ではあった。けれども話をしているうちにほかの方面ではたいへん魅力のあるインタビューイであることがわかったなどということはよくあります。そんなとき当面の調査目的はいっとき棚上げにしておいても，聞けるときに聞ける話は聞いておくというのが普通あるべき判断でしょう。一面からいえば，そうしたときにすぐさま話題を切り替えられるだけの調査内容のストックを，調査者の側も常に用意しておかなければならないということでもあります。

またあるいは，たずねていったところ，その知り合いの人がたまたま訪問中で，二人にインタビューをせざるをえないことになってしまった，などということもよくあります。インタビューイは一人がよいのか複数がよいのかは，一概にきめることができません。こちらの質問にたいして一人ではよくわからないとかよく思い出せないことが，数人で話をしている間に少しずつ思い出してきたということが期待できることもありますし，反対にその記憶が乱されるといった事態になって

しまうことも考えられます。なにしろ民俗調査は裁判所の証人尋問ではありませんから，与えられた環境のなかで最善と思われるインタビューをするしかないのです。

ともあれ，一度ある条件のもとでインタビューをしてしまえば，次回はそれを踏まえた応答にならざるをえないのですから，話者との一度の出会いは，たとえそのあとに機会があったとしても，それぞれが一期一会と考えておく心構えが必要なのです。

インタビュアーが現場で出会うであろうこうした個々のケースをあげていったらきりがないので，もう少し本質的なことにふれておきましょう。

フィールドワークの技法を学ぼうとする人は，いつか必ずラポールというフランス語を知ることになるはずです。ラポールrapportとは親和関係とでも訳したらよいでしょうか。「対面的な場面を伴う意識調査・人類学的調査・カウンセリングなどで，面接者と面接対象者との間につくる親和的・共感的関係」[9]というのが公式的な意味です。たしかにそれまで接触のない，あるいは日常的なつきあいのない人のところにでかけていって，時間をさいてもらい――ということはその人にとって物質的利益が期待できない，ということです――，ときにはプライバシーにたちいったことがらについて答えてもらうためには，基本的に相当程度にインタビューイ側の無償の厚意がなくてはならないはずです。その厚意をささえているのがラポールにほかなりません。

いってみればこれはあたりまえのことです。親和関係が深まれば深まるほど，インタビューはうまくいく可能性がたかまるでしょう。こちらの質問にたいしても真剣にうけとめ答えてくれる，思い出そうとしてくれる。度重なる訪問にたいしてもこころよく応じてくれる。そうすることで私たちの調査ノートはだんだん厚さをまし，充実したデータでうめられていきます。何かある事実を明らかにすべく，そこにひたすらせまっていくという立場をとるならば，被調査者たちとの間に親和的な関係をとりむすび，会話をできるだけスムーズに進めていくことによって，最小限の抵抗で最大限のデータを集積するということを目指すことになるでしょう。

しかしここで最も大きな問題は，会話を通したデータ収集はほんとうにそのようにして進んでいくのか，というところにあります。

なぜなら会話はそんなに無駄も抵抗もなく流れるように進むはずはありません。かえってあまりにもなめらかな会話でインタビューが進むようだったら，むしろその調査の結果には大いに警戒しなければならないかもしれないのです。なぜなら立て板に水のごとくに語られる事実があったとしたら，それは日ごろその人の中で反芻され続けていたからかもしれないのです。あるいはそのことについて自分自身調べてみたり勉強をしていたりしたため，以前に読んだ本の内容を語ってくれていた，というのは最もありうることです。調査者がとりわけ強い反応を示してくれるので，調査者を喜ばせてやろうという厚意が無意識のなかでインタビューイのなかに芽生え，事実をほんの少し脚色してしまうとか，そうしたくだりをとりわけ強調するとかといった事態は，双方が無意識である分だけ始末の悪いことになります。

一般的な技法として，誰かにインタビューするにあたって，事前にその人のことを徹底的に調べるか，あるいはできるだけまっさらな状態で対面したいと考えてほとんど下調べをしないままに臨むかといった選択があるといいます。フィールドワークの場合，まったく下調べなしでインタビュー

に臨むというのは論外ですが，反対に十分な事前調査や勉強があればよいというものでもない事態があります。さきに少し触れような，ある仮説を証明したいとか，ある事実がその土地に存在するかどうかを確認するための調査だったりした場合には，それを裏付ける回答が得られたということで満足してしまうという恐れは多分にあるでしょう。ある特定の答えがほしいという調査者の側の強い願望が目に見えない形で相手への圧力となり，知らず知らずに答えを誘導してしまう可能性についても十分にわきまえておかなければならないのです。

学問的インタビューの場で，調査者は話者からからできる限りの情報をひきだそうとします。話者が調査の場面で，常に一方的な情報の所有者であり発信者であると位置づけるならば，そういう想定のもとに調査は進んでいかなければならないでしょう。つまり最初に述べた例の5W1Hの登場です。しかしたとえばあなたが自分自身のすべてをわきまえていることはけっしてないのと同じように，話者がすべてを知っている，少なくとも意識の表層にのぼってくるような形で知っているわけではけっしてないと仮定するならば，インタビュアーはまた別のアプローチをとらなければなりません。それがどんなアプローチになるかは，その時々の成り行きのなかで選択されることですから，一般論として定式化できるわけではありません。たとえばラポールな関係をあくまで前提としつつも，そこに何か抵抗をもたらすような質問——ときにはぶしつけな——を投げかけてみることも，そんなきっかけになるかも知れません。それまで友好的に流れていた会話のやりとりをあえてせき止めるような質問をなげかけるのは，かなり決断のいることです。しかしそうすることによってはじめて話者は応答の歩みをとめて，なぜ自分はそのようにするのか，そのように考えるのか，そしてなぜ別のようには考えないのか，その答えを求めて自分の内側をのぞき込んでみようとするでしょう。そうした働きかけをおこなうこともまたインタビューの場面では必要になると考えておかなければなりません。

ともあれインタビューは調査者と被調査者のあいだの単なる情報交換ではありません。むしろ生身の人間と人間がであう場面であると考えるならば，日常の会話でおこるようなあらゆることがおこると考えなければならないでしょう。なによりも被調査者＝話者たちには，インタビューをスムーズに進めたいという調査者の側の勝手な思惑につきあわなければならない理由など何もないのですから。

さらにもう一つ，参与観察とインタビューという二つの方法はどのような関係にあるのでしょうか。

日本の民俗学においては，インタビューという方法は参与観察法よりもはるかに重要視されてきたという傾向があります。それは一般論として詳細な情報収集はやはりインタビューによらなければならないということもありますが，調査地への長期滞在を前提とすることの少ない日本の民俗学[10]は，資料収集のほとんどをこのインタビューによってきた，あるいはよってこざるをえなかったからです。その点は，たとえば20世紀にはいって急速に精密な方法化がはかられた文化人類学や民族学[11]との，大きな違いの一つでした。

俗に「百聞は一見にしかず」と言いますが，祭りのレポートを書く際に，実際にそれを見ていたか，インタビューだけですませてしまったか，という二つのケースを考えるならば，その優劣はあ

きらかです。実際の見聞を経ないインタビューだけにたよった調査報告の価値はゼロとは言いませんが，参与観察を経たものにくらべてはるかに劣るのは当然のことです。

では参与観察はインタビューに優越するのか，というならば，これも答えは「否」といわざるをえません。さきほども言いましたが，祭りをただ見ていただけではとうていすべてを理解できるはずがありませんから，適宜関係者に内容をたしかめることになるでしょう。祭りのすべてが終ったあとでいくら疑問点を確かめたのでは手遅れで，その場その場で確かめておかなければ参与観察自体が不十分なもので終ってしまいます。

さらに目に見えるものというのが具体的なものでしかありませんが，調査者が知りたいのは，けっしてそうした具体的な物事だけではないはずです。過去にはどうであったのか，なぜそのようにするのか，人びとはどのように考えているのか，将来はどうなるのか，などなど，その場その場で目には見えないことがいくらでもあります。目に見えるものからはじまって，目には見えないものごとについては言葉という表現媒体の潜在能力を最大限に活用する。あたりまえのことですが，参与観察とインタビューは相互に補完しながらでなければフィールドワークは十分に機能しないということも付け加えておきたいと思います。

フィールドで何を調べるか？

きょうの講義の最後に，日本の民俗学ははたしてどのようなフィールドワークを行なってきたのか，簡単に話しておきたいと思います。民俗学の仕事は一般に，一つは民俗誌の作成と，もう一つはより一般的な民俗学理論の構築を目指すものとに分かれます。この関係は地理学でいうならば地誌学と系統地理学との関係に似ていますが，民俗学においてそれぞれをさす明確な名称があるわけではありません。ここでの話はおもにその前者，民俗誌の作成にかかわるものです。

さて日本民俗学における民俗誌的調査の一つの特色は，この学問全体をカバーするスタンダードな調査項目が夢想されたというところにあるかも知れません。

その最初の試みは1934年から３年間にわたって実施された，一般に「山村調査」と呼ばれている大規模な調査プロジェクトを契機としたものでした。柳田国男に指導された研究集団が，全国52カ所の山村――といっても文字通りの山村というわけでなく，内陸部における農業を主体とする村落というほどの意味でしたが――において調査を行なったのです。その規模も画期的だったといえましょうが，もう一つの特徴は共通の調査項目が設定されたことです。調査担当者たちは『郷土生活研究採集手帖』というものを携行しておりましたが，これには100項目の質問文例の形で調査項目が印刷されていました。調査者はこのノートの余白に調査内容を書きこむというふうにして利用されたのです。後年，当初の52カ所に14カ所の調査地を追加し，項目ごとに全国的な調査結果をまとめるという形式で『山村民俗の研究』[12]という書物がおおやけにされました。またのちには，同様のスタイルで海村の研究も行われました[13]。

ここで設定された共通の調査項目はあくまで調査の項目であって，具体的なインタビューのなかみまで定めたものではないのですが，かなり強くインタビューの方向を規制することになったこと

でしょう。実際ここから発展して，のちにはインタビューの質問文例そのものを設定するという方法がうまれてきたのです。

1960年代になると，民俗学の体系的なシリーズ『日本民俗学大系』が編集されましたが，その最終巻[14]に，かなり詳細な調査項目が掲載されています。また『大系』よりは簡略でしたが，『民俗調査ハンドブック』[15]の巻末にもやはり調査項目リストがかかげられました。どちらも「実地調査に役だつよう配慮して作成したもの」[16]であるので，ここにあげられたとおりの質問を相手になげかけることによって一通りの調査ができるかのように見えます。しかしいっぽうで，「実地調査にあたっては，地域的特色に応じ，また調査目的によって，それぞれ取捨選択の必要が生じてくること」[17]あるいは「調査地の条件と自己の問題意識に基づいて独自の調査質問集を作成するように」[18]しなければならないことも述べられています。つまりこの質問項目はけっしてあらゆる調査において共通に設定されるべきもの，そしておおくの調査をとおしてデータベース化されることを意図していないことが述べられるのです。とは言えこのような注意書きは正論ではあってもおそらくは無理な話で，民俗調査におけるスタンダードだとうけとめられることになっただろうと想像されます。実際私も学生時代のごく初期においては，この項目を参照しながら質問を考えたものでした。

全国の民俗調査に対して共通の網をかぶせようとするこのような課題設定は，後年きわめて強い批判にさらされることになりました。民俗文化はその土地ごとに固有の条件に応じて存在するのだから，その土地のいわば個性と切りはなしてデータを集積し比較するのは方法的にきわめて大きな問題をはらまざるを得ない，というのが主な論拠です。その結果，民俗伝承の母体としての地域社会を総合的に調査し考察していかなければならないという考え方がもう一つの大きな流れとなり，地域社会の総合的な民俗誌を編むという方法が普及してきたのです。

このような地域民俗誌の作成は，第二次世界大戦後の1949年から刊行がはじまった，『全国民俗誌叢書』[19]にさかのぼることができるでしょう。その後民俗学が大学のなかにはいっていくことによって，学生の研究会などを中心とする地域民俗誌の作成がさかんになりました。それに地域の民俗学研究団体が編集する民俗誌，自治体史の一環としての民俗誌なども加わり，地域民俗誌のための調査が組織的な民俗調査の主流になってきたのです。その結果として全国規模での比較データの集積を目標とする，かつての山村調査のような統一調査項目主義はほぼ姿を消したように見えるのですが，いっぽうでかならずしもそうとは言いきれない面も残っています。というのは，民俗誌を作成しようとするにあたって，しばしば画一的な調査編集方針がそこにしのびこむからです。たしかに調査の際の個々のインタビューの場面では画一的にならない工夫がみられたとしても，全体としては民俗事象の分類に即した画一的な章立てにむかっていく傾向をもってしまったのです。その詳しい内容については，民俗学の定義あるいは分野分類というテーマで別の時間に話をするつもりですが，これもまた一種の統一項目主義といえるのでしょう。

それでは地域民俗誌が立ち至ったこの現実を，どう評価したらよいのでしょうか。たしかに地域それぞれの個性を明らかにしなければならないという当初の目的から見るならば，この統一項目主義が画一主義におちいったとき，その学問的怠慢は厳しく問われなければなりません。そして率直にいえば，現状でその危険を深刻にうけとめる必要があるとも考えているのです。

しかしいっぽうで，それは必然的な道筋であったとも考えられるのです。今回の講義の最初に私は，フィールドワークという方法を，実験および文庫作業と対置させてとらえました。後者の二つの方法は，第1講で指摘した第1類型および第2類型[20]の学問に相当します。この二つの学問類型を特徴づけるのはともに研究者の側からの資料・データへの積極的な関与，いいかえれば厳格なコントロールでした。それにたいして第3の類型であるフィールドワークの学問において，フィールドとはこれまで述べてきたようにコントロールすることが不可能な世界なのです。ですからそのままでは学問という資格の有無を厳しく問われることさえ覚悟しなければならないかもしれません。そうならないためにはどうしたらよいのか。その一つの答えが，民俗誌における調査項目の統一にほかなりませんでした。ともかくもあるレベルでデータの斉一性をはかることによって，同じ基準で民俗誌の評価をとることができる。民俗学者の大勢はそう考えたのではないでしょうか。しかしそれは諸刃の剣でもあります。人間の生活は，たとえ学問の世界とはいえ，はたして比較ができるようなものなのか，あるいは比較をするとしたら項目を統一すること以外にも何らかの方法があるのではないか。いま日本の民俗学は，そんな深刻な疑問にさしかかってきたところだといってよいかもしれません。私がそれにどんな答えを出せるのか，この講義を通して議論を積み重ねていきたいと考えているところです。

1　本稿は前講（真野俊和2005）に続くものである。筆者が現在勤務する筑波大学では，第一学群人文学類において，おもに1，2年次生を対象とする講義「民俗学概説」（この授業は第二学群比較文化学類において「民俗学概説（文化人類学Ⅱ）」と呼ばれている）を開講している。人文学類には考古学・民俗学主専攻内に「民俗学・文化人類学コース」が設定されている。「民俗学概説」はそのなかでの入門的科目であるといえる。いうまでもなく民俗学を専攻しようとする学生たちにとっては必修科目であり，その後いくつかの専門科目を受講したのち，毎年10人台～20人台の学生たちがこの領域で卒業論文を書いている。本稿は筆者のこの講義にもとづいたものである。すなわち，2005年度およびそれに先立つ毎年4月，実際に教場で行われた第二回目の講義録に多少の手を加えたもので，これに「注」として若干の説明を補足した。ただし文章化の段階で考察の深まったところもあり，その部分に関しては講義録そのままといえない。しかしこの部分に関しても，次年度以降の講義に生かしていくつもりである。

2　鎌田東二（1985，2002）の著書名に見られる表現。

3　これはインターネットのウェブ・サイト「目に映る21世紀：秋葉原フィールドワーク＆トリプルトーク」（online）でみかけたもので，一種の現代風俗探訪といった内容であった。「おたく・音楽・ファッション・資本主義」というサブタイトルがついていて，街並みや店を歩いてみることがその実質である。したがってそこになんらかの方法や基準があるというものではない。

4　サンスクリット語に限っていうならば，この言語は当時すでにインド古典のなかに見いだすことができるのみで，実際にその言葉が話される現場にたつことは不可能だったと考えられるからである。

5　青山道夫（1961）は「『古代社会』はむしろエンゲルスによって一般化されたといってよいのであり，社会主義の基本的文献の一つとなった」としている。

6　慶應義塾大学湘南藤沢キャンパスにおける加藤文俊の2005年度春学期授業「フィールドワーク法」シラバス（online版）には，「じぶん自身で『問題』を定義するという『ものの見方』」の理解・習得がこの授業の目的の一つである旨のことが述べられている。この授業は大きく社会学の領域内のものであるが，事情はすべてのフィールドワークに共通するといってよい。

7　福田アジオ（1967）23ページ。近年「民俗」の概念をめぐって同様の言説がしばしばなされているが，本稿ではそれらに先立つものとして，福田のそれをあげておくことにする。もっとも福田の主張が，それゆえに調査者の問題意識の重要であるという方向に向かったのに対し，近年のそれはややネガティブなニュアンスで語られるところに大きな相違があるとも言える。この点についてのもうすこし踏み込んだ議論については別稿を期すことにしたい。

8　柳田国男1934

9　『広辞苑』（岩波書店）による説明

10　このようであった事情は，たんに方法論の違いに帰着させるばかりでなく，両学問をとりまく社会的環境

の違いからも理解されなければならないだろう。その要因として以下のような事情を考えてみたい。

①アマチュア研究者によって担われるところの大きかった日本民俗学にあって，調査地での数ヶ月から数年におよぶ滞在は事実上不可能であった。ほかに仕事をもっている彼らは自分自身の休暇などを利用して，短期間の調査を断続的に繰り返すしか，時間の余裕をもたなかったのである。必然的に参与観察よりもインタビューが調査手法の主流にならざるをえなかった。もっとも大学等における研究者の数が増加した今日にあっても，民俗学の調査はせいぜい数週間といった時日を限度とするのが普通であろう。もはや短期間の調査の積み重ねという手法は，方法論の一つといってさえよい段階にきている。

②さきにも触れた「内省の学問」という指向は，研究者自身が生活する地域社会へと調査の目をむけることになった。したがって長期滞在の必要があまりなかった。

③いっぽうで初期の民俗学においては，広範囲における比較研究ということが目的とされてきたため，数多くの調査地において効率のよい調査を行なう必要が優先された。

11 とりわけイギリス社会人類学の機能主義的方法を開発した，ラドクリフ・ブラウンおよびマリノフスキーが試みたアジアにおける長期滞在型調査が，その嚆矢になったと位置づけられよう。ラドクリフ・ブラウンは1906年～1908年にベンガル湾東部のアンダマン島において，マリノフスキーは1915～1916年および1917～1918年にニューギニア東方のトロブリアンド島において調査を実施した。

12 柳田国男（編）1937

13 柳田国男（編）1949

14 郷田洋文・井之口章次　1960　109～157ページ

15 上野和男・高桑守史・福田アジオ・宮田登（編）1974　217～249ページ

16 郷田洋文・井之口章次　1960　109ページ

17 郷田洋文・井之口章次　1960　109ページ

18 上野和男・高桑守史・福田アジオ・宮田登（編）1974　217ページ

19 柳田国男の監修，民俗学研究所の編集，三省堂・刀江書院刊として，1949～1951年の間に7冊が出版された。原則としてこのシリーズは一人一地域で行なった地域民俗誌であった。そのなかには山村調査の採集手帖に基づく調査も入っていた。

20 真野俊和2005参照

文献およびWebpage

青山道夫　1961『古代社会』「解説」岩波書店（岩波文庫）

上野和男・高桑守史・福田アジオ・宮田　登（編）1974「民俗調査質問文例集」上野和男・高桑守史・福田アジオ・宮田登（編）『民俗調査ハンドブック』吉川弘文館

鎌田東二　1985『神界のフィールドワーク―霊学と民俗学の生成』青弓社

鎌田東二　2002『平田篤胤の神界フィールドワーク』作品社

郷田洋文・井之口章次　1960「日本民俗調査要項」。大間知篤三ほか編『日本民俗学大系13巻　日本民俗学の調査方法.文献目録・総索引』平凡社

真野俊和　2005「人文学のシステム―講義録「民俗学概説」第1講―」筑波大学地域研究研究科編『地域研究』26

福田アジオ　1967「民俗資料と民俗調査」『会報』7　東京教育大学民俗学研究会

柳田国男1934『民間伝承論』

柳田国男（編）1937『山村生活の研究』民間伝承の会

柳田国男（編）1949『海村生活の研究』日本民俗学会

NINE online：目に映る21世紀：秋葉原フィールドワーク＆トリプルトーク
http://srysrysry.blogzine.jp/meniutsuru/2005/01/korega.html　アクセス日時：2005.11.19

加藤文俊online：「フィールドワーク法」
http://gc.sfc.keio.ac.jp/cgi/class/class_syll_view.cgi?2005_19877　アクセス日時：2005.11.19

補注

文末の「注」および「文献およびWebpage」においてonlineとあるのは，インターネット・ウェブページを指している。ウェブページの性格上，随時変更や消滅ということもありうるので，筆者が成稿段階で最後にアクセスしたURLと日付を記しておくことにした。